

渡谷利香作 「エリート」

男子 起立、礼！

先生 この前のテストを返すから、名前の順に取りに來い。相川、井口、小川、加藤。

奥村絹江 ねえ黒田君、ずいぶんうれしそうな顔してるじゃない？

黒田直人 うん。

奥村 よかったの？

黒田 うん。

奥村 で、幾つ？

黒田 24 だよ。

一同 (笑い)

男子 おい、お前も悪趣味だな。

奥村 だって、毎度のことながら、あの人。

男子 ほんとだよな。24 点で心から喜んでんだぜ、あいつ。

奥村 あのうれしそうな顔、見てみて…。

男子 (クスクス笑う)

先生 静かにしろ。ええと、今回のこのクラスの最高は、ええと、佐藤の 89 だ。

一同 「ええ、またあ？」etc. ガヤ

先生 平均は 53 だ。まあまあということだな。

奥村 すごいじゃない、佐藤君。

佐藤駿介 大したことないよ。

奥村 そうね、あなたにはそれが当然なんだったわね。(モノローグ)ふん、うれしくせに。やあね。素直じゃないったら。まだ黒田君のほうがかわいげがあるわ。

ナレーション ここは青春高校 1 年B組の教室です。いろんな人がいて、なかなか楽しそうなクラスですが、中でも、黒田君と佐藤君、この 2 人の対照的な性格は、何かにつけて、クラスの着^{さかな}にさせられています。ほら、ここにも 2 人を着^{さかな}にして話している女生徒がいます。奥村さんと親友の武田美紀です。

奥村 でも美紀、おかしいわよね、あの 2 人。

武田美紀 うん。

奥村 2 人並んでると、特に黒田君がさ。自分が並み以下だってこと、分かってないのか、“自分は頭がいい”と信じ込んでるって感じじゃない？

美紀 そんな黒田君を見ながらさ、佐藤君を見てると、なんて言うの、あの人、いつも自分の成績を守るのに必死じゃない。

奥村 そう、むなしさみたいなのが漂ってくるのよ。

美紀 みつともないわよね、あそこまで意固地になって勉強するなんてさ。

奥村 そう、人間もつとおおらかであるべき。…なーんてね。もっともさ、黒田君まで行くと、行きすぎだけどね。

ナレーション こんなことを、勝手に話していますが、当のご本人たちはどう思っているんでしょうか？

佐藤(モノローグ) あの大バカ黒田。あいつのお陰でおれまでピエロにされちまった。大体今、笑ってるやつらも、

見てろ。お前らがおれのことどう思ってるかぐらい、分かってらい。でも、おれが正しいってことがお前らには分かっちゃいない。おれは人の上に立って歩いていく人間なんだ。“エリート”なんだよ。今におれを尊敬のまなざしで見ようになるさ。しかしあの黒田、いつでもヘラヘラしやがって。あれでも人間かよ。人にバカにされてるの知らないのかね。ああ胸クソ悪い。

ナレーション 一方、黒田君は――。

黒田(モノローグ) 僕が何点取ろうと、何点で満足しよう、勝手じゃないか。好きで勉強してるんじゃないんだし。僕は好きな数学だけ点が取れればいいんだ。そんなにまんべんなく点を取ることがどうして大切なんだ？ 僕は自分の成績に一応満足してんだし。大体、試験の点数で、まるで人間の価値そのものが決まってしまう。それでヘンなエリート意識が人の心を支配する。今の教育制度がやっぱり良くないんじゃないかなあ。このまま行くと、赤点ばっかになるもんなあ。でも好きでもないことなんかしたくないし、かといって、いつもクラスの物笑いの種にされるのもイヤだな。よし、次の数学は頑張るぞ！

ナレーション それから数週間後のことです。大きな全国模試があり、その結果が学内の掲示板にはられたのでした。

全員 「何あれ？」「番狂わせじゃない」etc. 生徒のガヤ

男子1 おい、あれ見ろ！

奥村 黒田直人、数学、全国 98 位。校内 1 位。

女子 え、黒田って、あの黒田君？

男子2 信じられねえや。

佐藤1 でもよ、1のBって書いてあるぜ。

男子2 そう言えばあいつ、数学だけはいい点取ってたような気もするけど、こんなにいいとはなあ。

女子 でもあの佐藤君を抜くとはねえ。

男子2 あいつ、いつも他人を見下してたけど、特にバカにしていた黒田に抜かれたんだから、あれはショックだなあ。

ナレーション そうです。だれよりもショックだったのは、彼、佐藤君でした。

佐藤(モノローグ) おれが、このおれがああの黒田に抜かれたなんて…。ああ、信じられない。信じたくない！このおれが負けた。黒田に?! おれはなんのために勉強してきたんだ？ こんな思いを味わうためにか。ああ、なんにも考えたくない。なんのために一生懸命…。チクショー！（エコー）

ナレーション その後、佐藤君は失意のどん底に落ち込んでしまい、だんだん成績も低下してしまいました。

奥村 びっくりしたわねえ、美紀。黒田君が1位を取ったのも驚異だったけど、そのあとの佐藤君の落ち込み方。

美紀 ほんとにねえ。なんか張りつめた精神のもろさを見せつけられたっていう感じ。

奥村 怖いねえ、そういうのって。精神病なんかそんなところから来るんでしょう？ あの人、自分がエリートだったと思い、すがろうと必死だったって感じじゃない？

美紀 “エリート”の語源、知ってる？

奥村 ううん。

美紀 “神に選ばれた者”という意味の言葉から来てるんですって。つまり、さかのぼればユダヤ人の“選民思想”。

奥村 ずいぶんすごいこと知ってるじゃない、美紀。

美紀 わたし、今、教会行ってるの。神様信じてるわけじゃないけれど、友達に誘われてね。そこで聞いてきたんだ。

奥村 ふーん。

美紀 でも、その本当の解釈は、“神様を信じてる人”ってことなのね。神様によって選ばれたんで、自分で勝手にそうするのでも、そうなるのでもないっていうわけ。

奥村 なるほどね。

美紀 だから結局、人間に分け隔てはないっていうことよ。“神を信じるか、信じないか”の差があるだけで、結局そのほかの差が出てくるのは、人間のごう慢からなんだって。

奥村 “ごう慢”か…。そうね、表面しか分からないくせに、自分を基準にして、適当に決めちゃうもんね。「あの人はわたしより頭がいい」とか「悪い」とか。でも結局何も分かってなかったもんねえ。佐藤君の弱さや黒田君の強さ。佐藤君が実はあんなにもろかったなんて。

美紀 うん。結局自分を真ん中にした判断だもんね。人によってまちまちすぎるしね。

奥村 あの佐藤君だって、会社辺りに行ってたら、普通の成績ってことになるんだろうしね。でも、よくよく考えれば、わたしたちもそんな当てにならないものを頼りながら生きてるわけじゃない？ そんなもんで自分が偉いと思ひ込んだり、他人を軽べつしたりして、自己満足しながら生きてるわけじゃない。何か怖いなあ、深く考えると。ヘタすると、そのうちわたしも佐藤君みたいになるのかなあ。

美紀 でね、わたし、教会で話聞いてて考えたんだけど、“人の見方がそんなに当てになんないなら、自分の生きるよりどころはどこに置いたらいいんだろう”って。なんか、自分が浮き草のような、なんの存在価値もないような気がしてこない？ でも、それは結局本当の基準が分かってないからなんだって気がついたの。偽物は人の心を惑わすだけってことよ。つまりさ、“わたしは神様に愛されてる人間なんだ”って気づくことね。それが根本なんじゃないかな。

奥村 なんかよく分かんないな。

美紀 わたしだって、ちゃんと分かっているわけじゃないけど…。例えばさあ、わたしが佐藤君のような目に遭って、絶望したとしても、“愛されてる”って感じることは、自信の回復にもつながるじゃない。

奥村 でも、神様の愛なんてどこから分かるの？ 目に見えるわけでもないのに。

美紀 わたしも教会行ってるだけで、クリスチャンっていうわけじゃないの。でもね、最近、なんだか分からないけど、“神様はいるんだ”っていう気がするの。そう思わせてくれること自体が、神様がわたしに愛を示してくれているんじゃないのかなあ。

奥村 ふーん、そんなものかなあ。

美紀 あのさあ、この間、聖書読んでいて、「ふーん」って考えさせられるところがあったのね。ほら、ここなんだけど…。えーと、コリント人への第一の手紙の、1章の 26 節ね。「兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない。それなのに神は、知者をおぼろしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をおぼろしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることはないためである。」(1:26-29)

わたし、佐藤君って典型的なエリートだと思っていたの。だけど、ここ読んでいて、「ああ、こ

れが、神様に選ばれた聖書の言ってるほんとのエリートなんだな」って思ったのね。そしたら、わたしみたいにドジばかりやっている者も愛して、選んでくださる神様って、ほんとにすごいんだな」って気がしてきたの。

奥村

ふーん。“ほんとのエリート”かぁ…。

ナレーション

そう言いながら、奥村さんは、まじまじと武田美紀の顔を見つめました。そして、「これはごう慢な顔じゃない。不思議に輝いていて、きれいな顔だな」と思ったのでした——。

<完>